



走る電気釜 485系200番台

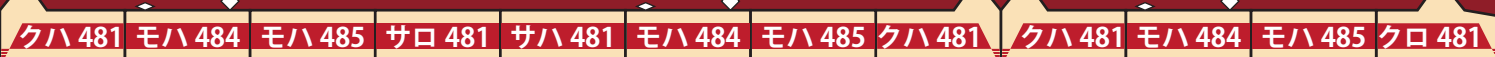
名門特急電車 をたのしむ。

「電気釜」とは上の写真にある485系200番台の丸みを帯びた面長の前面形状から名づけられたあだ名だ。電気釜というのは炊飯器のことで、言われるとたしかにそんな風に見えなくもない。485系として馴染みの顔だが、この顔が初めて登場したのは485系200番台からで、それまでは下の特急「みどり」の写真のような、いわゆるボンネット型と呼ばれる顔をしていた。併結運転を可能とするため、このような姿となった。後に登場する485系300番台との大きな違いは、前面の貫通扉の有無だ。KATOの485系シリーズに新たな車両が加わることにより、再現できる編成の幅がぐっと広がる。全国各地の特急の再現に欠かせない「トレインマーク」も同時発売予定だ。是非、奥深い485系の世界をお楽しみいただきたい。

- 2018年5月発売予定!**
- 10-1479 予価 ¥17,800+税
485系200番台
 - 11-328 予価 ¥1,600+税
トレインマーク変換装置
485系200番台用(国鉄・イラスト)
- 2018年5月再生産予定!**
- 10-1129 485系後期形2両増結セット ¥3,800+税
 - 4556 サハ481初期形 ¥2,000+税
 - 4570 サロ481後期形 ¥1,700+税

編成例

「かもめ」+「みどり」



「やまびこ」



「雷鳥」



「にちりん」



実車の併結時、貫通扉は開きません。

2018年5月発売予定!
485系特急「みどり」 10-1480 予価 ¥14,000+税

特急「みどり」は、現在も博多～佐世保間で活躍している九州の特急電車だ。かつてはこの特急も485系電車で運転されていた。当時から基本的には4両編成で運転されていて、国鉄時代には最も短い特急電車として有名にもなった。この編成は両端で顔が異なる姿をしており、片側は右写真のようにボンネット形のクロ481、もう一端は貫通扉を備えるクハ481で構成されている。博多～肥前山口間ではクハ481側に特急「かもめ」号を併結、堂々の12両編成で運転されていた。併結運転を行うために登場した485系200番台だが、中々併結運転は実現されず、この「かもめ」+「みどり」でようやく実現となった。貫通ホロの使用が期待されたがこの時は実現しなかった。貴重な485系先頭車同士の併結、是非とも模型で楽しんでいただきたい。セットには「みどり」の愛称表示を文字とイラストの2パターンで用意しており、時期による表示の違いを楽しめる。



特急「みどり」の魅力。

パンタ付き客車 ブルートレインの異端児

1月
2018年

パンタグラフがあるのに自走しない!? ラウンジカー「スハ25」

時は1990年。大都市を起点に各地への夜行列車がまだ盛んに走っていた。古きよきあの日々。多くのブルートレインが行き交う中に混ざって、その編成はいた。ぱっと見た限りでは当時最新鋭の24系25形客車で構成されたブルートレインだが、おかしなことに客車のサービスイ電源を供給する「電源車」がどちらの車端部にも繋がっていない。代わりに4号車だけ屋根の高さが他の車両よりも低く、しかもパンタグラフが2つ、堂々と掲げられているではないか。先頭には「瀬戸」のヘッドマークをつけたEF65電気機関車が列車を引っ張っているというのに一体これはどういうことなのか。

このパンタグラフがついた奇妙な客車こそが、編成のサービスイ電源供給を担う車両「スハ25」である。車内はロビーやサービスイカウンタ、シャワールームを備えている。オハ12をベースに改造しているため、屋根の形状が他の車両とは異なる姿をしている。この編成が何故編成端に電車兼荷物車の「カニ」を繋げずにこの車両をわざわざ使用しているのか。実はこの1990年頃、バブル景気の風潮に合わせて、「北斗星」「カシオペア」「トワイライトエクスプレス」といった豪華寝台列車が登場した。丁度今のクルーズトレインのように高級指向の列車が走り始めたわけだが、この「トワイライトエクスプレス」用の電源車が必要だったため、供出された結果数が足らなくなった電源車を「スハ25」で補ったわけである。電源車の役割を「スハ25」に任せ、残りの荷物室はどうしたかという点、編成端に「オハネフ25」の端部側に荷物室を設けた車両を用意した。この車両には300番台の番号が与えられた。ほかには個性派のブルートレインの姿を是非、模型を購入して確かめていただきたい。

編成例

←高松													寝台特急「瀬戸」													東京→												
EF65 1000	1号車 オハネフ25 302	2号車 オハネ25 207	3号車 オロネ25 304	4号車 スハ25 302	5号車 オハネ25 158	6号車 オハネ25 175	7号車 オハネフ25 147	8号車 オハネ25 162	9号車 オハネ25 200	10号車 オハネ25 187	11号車 オハネ25 196	12号車 オハネ25 169	13号車 オハネフ25 153																									
←下関													寝台特急「あさかぜ」(3・2号)													東京→												
EF66	1号車 オハネフ25 302	2号車 オハネ25 207	3号車 オロネ25 304	4号車 スハ25 302	5号車 オハネ25 158	6号車 オハネ25 175	7号車 オハネフ25 147	8号車 オハネ25 162	9号車 オハネ25 200	10号車 オハネ25 187	11号車 オハネ25 196	12号車 オハネ25 169	13号車 オハネフ25 153																									

「あさかぜ」
としても活躍

今回紹介した「瀬戸」で使用された客車は、同時期の寝台特急「あさかぜ」号にも共通で運用されていた。「あさかぜ」号を再現したい方には欠かせないEF66を同時再生産予定。

5月再生産予定!
EF66 後期形
ブルートレイン牽引機
3047-2 ¥6,500+税

瀬戸大橋を渡るブルートレイン「瀬戸」

1988年、瀬戸大橋の開通とともに寝台特急「瀬戸」は高松までの乗り入れを開始した。瀬戸大橋を渡るブルートレインとして話題にもなった。このブルートレイン「瀬戸」には必ずEF65が牽引を担っていた。というのも瀬戸大橋を渡る際にEF66だと軸重が重すぎる、簡単にいうと重量オーバーだったのだ。1990年頃からは例のスハ25を含んだ24系25形客車での運転が行われ、何かと話題の尽きない編成である。他の名門ブルートレインなどと同様に、ブルートレイン「瀬戸」は廃止され、もう青く輝く客車を目にすることは出来ないが、寝台特急としては今もその系譜を「サンライズ瀬戸」が継いでいる。

5月発売予定

N 24系25形 寝台特急
「瀬戸・あさかぜ」
10-1484 7両基本セット 予価 ¥15,800+税
10-1485 6両増結セット 予価 ¥13,000+税

5月発売予定

N EF65 1000
後期形 JR仕様
3061-2 予価 ¥7,200+税

